

○県内のカンキツ産地では、生産者の高齢化による**栽培面積の減少**、それに伴う**生産量の減少**が課題。また、極早生温州は、県内約3割の栽培面積があり、高単価で取引される半面、既存品種では低糖度が課題。

○県育成のウンシュウミカン新品種「早味かん」は、9月下旬に出荷可能で良食味な極早生種の導入を推進して、**生産者の確保、安定生産技術の確立による経営安定**を目指し活動。

○平成29年には**栽培面積56ha、出荷量387t**となり、改植更新も進展。

具体的な成果

1. 栽培面積の拡大と果実品質の向上

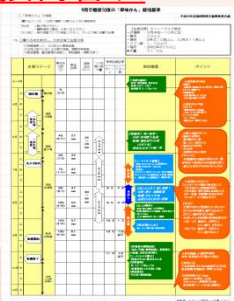
- 栽培面積と出荷量は、平成27年の ha、tから、29年には56ha、387tに増加
- 生産上の課題として、小玉、酸高になりやすいため、肥大・減酸対策を検討、実施
- 早期摘果、水分管理による品質の向上
- 冬季GA処理による樹勢維持

「早味かん」の栽培面積および出荷量の推移

年	25	26	27	28	29
栽培面積(ha)	0.2	1.6	27	37	56
出荷量(t)	0	0	13	106	387

2. 県域栽培基準作成による技術普及

- 品種特性に基づく、特徴的な生産技術対策を周知
 - ・早期摘果
 - ・樹勢維持
 - ・水分管理
- 栽培技術の平準化



3. 農家所得の向上

- 販売単価（H29年）362円/kgと既存極早生品種の約1.7倍
- 10aあたり所得は、収量2tを確保すれば30万円を超え大幅に向上

4. 「早味かん」のブランド化促進

- ポスター、リーフレットを作成
- PR動画を作成し、Web上で公開



普及指導員の活動

1. 品質向上のための技術開発

- ・試験場と連携した技術開発
- ・現地ほ場で技術を実証、改善技術を組み立て



2. 開発技術の普及

- ・肥大促進対策
6月下旬に葉果比20で早期摘果。肥大・減酸推移に応じた水分管理等を実施
- ・樹勢維持対策
冬季GA処理による着花調整



3. 生産者の組織化と改植更新

- ・JA部会内に「早味かん」生産者を対象に、地域内で定期的に現地検討会等を実施
- ・既存園地での改植更新、大規模基盤整備におけるマルドリ栽培の実施、



普及指導員だからできたこと

- ・新たな生産技術を試験場と連携しながら、**コーディネート機能**を発揮して現地実証するとともに、展示ほを活用した**細やかな技術対策を支援**

- ・品種特性に応じた現地技術を組み立て、開発技術の早期普及を図るため、産地間で連携した実証試験を展開

福岡県

カンキツ新品種「早味かん」の普及推進

活動期間：平成28～29年度

1. 取組の背景

福岡県は全国9位のカンキツの生産地だが、高齢化・担い手不足による生産力の減少、温暖化等による生理障害や病害虫の多発により、厳しい経営が続いている。

また、極早生ウンシュウミカン（収穫期9月中旬～10月中旬）は、露地ミカンで最も早い出荷、高価格での取引によりウンシュウミカン栽培面積の約29%を占める（約400ha）。

しかし、既存品種は糖度が低く（9度台）ウンシュウミカン全体の評価を下げる原因から、市場および消費者からは良食味品種の生産が期待されている。

一方、「早味かん」は、県が育成した「ゆら早生」の珠心胚実生品種。9月下旬から出荷可能な良食味品種だが、小玉・酸高傾向なため、技術改善が求められていた。

そこで、平成28年から県域のプロジェクトに位置付け①「早味かん」の安定生産技術の確立と②既存品種から「早味かん」への普及推進を行い、農家所得の向上を図る目標に課題解決を行った。

2. 活動内容（詳細）

(1) 品質向上のための技術開発

県試験場と連携し、効果的な品質向上技術を検討した。試験場で効果が認められた早期摘果技術を、現地ほ場で実証した結果、園地条件や効果がやや異なるものの、いずれも果実肥大促進効果がみられた。

次に、収穫時の減酸促進技術を検討した結果、8月上旬時点で、果実肥大や果実品質の推移からかん水処理により、効果が認められた。

樹勢は、現地で栽培を始めて着花過多による樹勢低下や収量減少が問題となり、冬季のジベレリン（以下GA）処理による着花調整、秋季～春季の施肥の徹底により、維持・改善できることが明らかとなった。

*産地ブランド発掘事業（国庫：平成28年～29年）

第3表 「早味かん」実証試験ほ場の収量、果実品質（平成29年度）

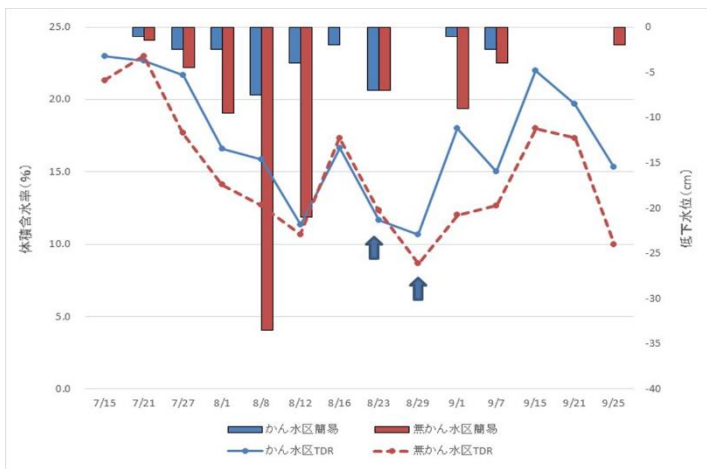
普及センター	摘果		仕上げ摘果	摘果剤	収穫日	収量 (kg/樹)	S級以上 (%)	果実品質			備考
	時期	葉果比						果重(g)	糖度	酸	
福岡	6/19	20	8/21	—	9/26	27.7	23.4	72.7	11.0	1.16	
北筑前	6/27	20	8/21	—	9/29	14.4	46.9	80.8	12.7	0.92	節水管理
	7/12	20	8/21	—	9/29	13.1	19.9	72.6	13.0	1.05	
南筑後	6/22	20	8/8	—	9/20	30.3	68.2	85.6	11.2	0.97	
	6/22	20	8/8	ターム1000倍	9/20	31	77.5	86.6	10.5	0.91	7/7見直し摘果、8/20 かん水
	6/22	20	8/8	フィガロン1000倍	9/20	19	64.2	83.2	10.7	0.94	
	7/7	15	8/8	—	9/20	25.1	46.5	82.4	10.7	0.85	
八女	6/16	20	8/8	—	9/29	23.4	72.8	—	10.7	0.83	8/2,7,23,9/1 かん水

(2) 開発技術の普及

開発技術の特徴を図に示した。各普及センターでは園地条件や樹勢に基づいて品質向上技術の種類を選択して普及が進められている。

具体的には、慣行摘果より早い6月下旬に葉果比20になるように早期摘果を行い、その後、シートマルチ栽培を行い、8月上中旬に日果実肥大が2mm以下、また糖度8.5%以上、酸度2.8%以上の場合、かん水処理を実施する。また、収穫後、十分な施肥を実施し、樹勢を回復するとともに、次年度着花が多く予想される場合は、冬季にGA処理を実施し、着花調整、新梢確保等状況に応じた対策を講じている。

早味かん・秋王ブランド確立対策事業（県単：平成28～29年）



かん水試験時の土壌水分推移

冬期GA処理による着花調整

(3) 生産者の組織化と改植更新

JA 部会内に「早味かん」生産者を対象に、地域内で定期的に現地検討会等を実施して、生産者相互間の意見交換、技術の向上を図っている。

さらに、既存園地の極早生温州や老木樹を中心に「早味かん」へ改植更新を行い、生産性・収益性の高い園地への整備が進み、また、大型基盤整備園地では、マルドリ栽培を導入した「早味かん」への新植が進んでいる。

早期摘果展示ほの様子

* 果樹経営支援事業(国庫：平成25年～)



早期摘果展示ほの様子



基盤整備への新植の様子

3. 具体的な成果（詳細）

(1) 栽培面積の拡大と果実品質の向上

栽培面積と出荷量は、平成 27 年の 27ha、13t から、29 年には 56ha、387t に増加した。生産上の課題として、小玉、酸高のため、果実肥大・減酸促進対策を検討し、園地の状態に応じた対策を実施している。

また、着花過多による樹勢低下が問題となったため、施肥や冬期の GA 処理等の対策により樹勢維持を図っている。

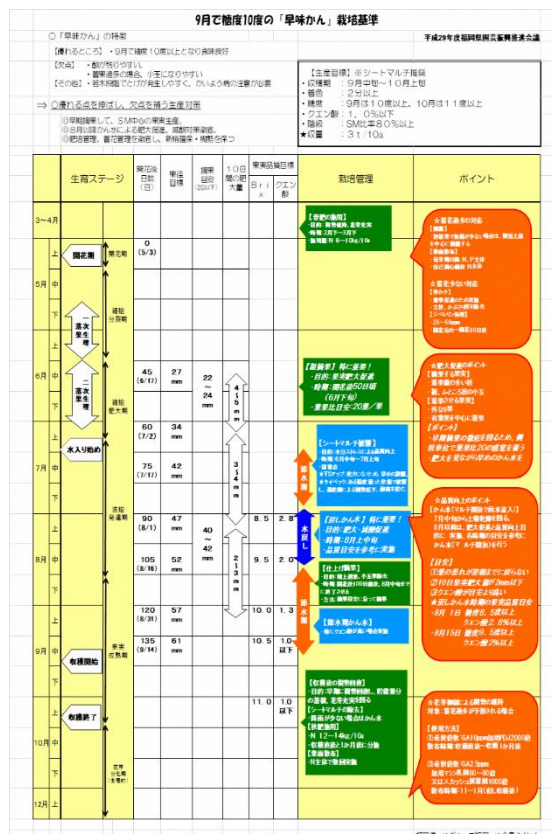
栽培面積および出荷量の推移

年	25	26	27	28	29
栽培面積 (ha)	0.2	1.6	27	37	56
出荷量 (t)	0	0	13	106	387

(2) 県域栽培基準作成による技術普及

県域のプロジェクトチームでこれまでの取り組みで明らかになった、特徴的な生産技術対策を取りまとめて、技術者向けの栽培基準を作成した。

高品質果実の安定生産のための結実管理、水分管理、樹勢維持管理について周知することで、栽培技術の平準化を図っている。



(3) 農家所得の向上

販売単価 (H29 年) は 362 円/kg と高く、既存の極早生品種の約 1.7 倍となっている。10a 当たり所得は、収量 2 t を確保すれば 30 万円を超え、大幅に向上する。

(4) 「早味かん」のブランド化促進

ポスター、リーフレットを作成するとともに、PR動画を作成し、Web上で公開している。また、市場、果実店、駅前広場等での積極的な販売促進、認知度向上の取り組みも実施している。

4. 農家等からの評価・コメント（県内A農協）

「早味かん」は、市場関係者の評価も高く、その甘さと食味の良さは9月に出荷されるミカンの中では日本一だと思っている。そのため、カンキツ産地の活性化を図るうえで欠かせない品種と考えている。早期摘果・シートマルチ栽培、水分管理技術による品質向上、ブランド化による有利販売など、今後も関係機関の一体となった支援をお願いしたい。

5. 普及指導員のコメント（県内普及指導センター 主任技師・技術主査）

産地内に「早味かん」生産者を対象に、展示ほを活用し、細やかな指導を行い、高品質生産技術の早期普及を図るとともに、県内産地間で連携した技術改善試験の検討・情報共有、意見交換を行うことで、効率的な開発技術確立を行っている。今後も普及を進めていくために、早期成園化、品質向上対策、販売対策等について関係機関の協力をお願いしたい。

6. 現状・今後の展開等

これまでの活動により、品質向上・樹勢維持対策などある程度の成果が挙がり始めている。これから改植による若木が多いため、順調に生産量を伸ばし、安定した市場評価を得るためにも、引き続き、栽培面積の拡大、生産安定技術の向上を目指していく。